

令和 8 年度第 1 回大阪府環境放射線評価会議 議事録

日時：令和 8 年 8 月 3 日（月）午後 2 時から午後 3 時まで

場所：災害対策本部会議室（新別館北館 1 階）

1. 開会

○事務局（司会）：令和 8 年 3 月 31 日をもちまして、大阪公立大学の松浦委員は辞任されました。その後、名古屋大学大学院の山本委員にご就任いただいております。

○事務局（司会）：大阪府環境放射線評価会議設置要綱第 3 条第 1 項によりまして、これからの議事につきましては村田委員長をお願いしたいと思います。

2. 議事

（1）令和 7 年度環境放射線監視結果について

○事務局：令和 7 年度環境放射線監視結果について説明

○村田委員長：新しく測定器を更新されたとの説明があり、高さは屋根の上から地表面に変更があったという説明がされたかと思うのですが、水平位置はかなり違う場所に設置されたのでしょうか。

○事務局：熊取南小学校局につきましては、同じ駐車場の中の端から端ぐらいの移動になっていますので、5 メートルから 10 メートルぐらい水平に移動していることになります。上小阪小学校局につきましては、東大阪市内にオフサイトセンターという原子力災害時の拠点施設があるのですが、そのオフサイトセンターで代替測定を行いました。立地の関係もあって、上小阪小学校の場合は下が地面で上が何も無い状態ですが、代替測定を行ったオフサイトセンターは下がアスファルトで上空に少し建物の軒があるようなところにしか設置できなかったのも、少し条件の違うところで代替測定を行いました。

○村田委員長：熊取南小学校は、ほぼ地面的には一緒の条件で高さが違うことで絶対値が微妙に異なることが理解できました。上小阪小学校については距離が離れていることと、そもそも地面が土とアスファルトの違いがあるため、こちらも絶対値がずれていることを理解できました。

ちなみに、局舎は全て更新することになりますか。

○事務局：今後、観測局を順次更新する予定となっており、令和 11 年ぐらいまで少しずつ観測局が入れ替わっていくこととなります。今年度も、まだ確定ではありませんが部分的に入れ替えを行えればと思っています。

○村田委員長：つまり全部の局舎を更新するのですね。

○事務局：はい、全て更新します。現在の観測局は全て設置してから15年ぐらい経過していることになりますので、更新時期はバラバラですけれども、全て入れ替えになります。

○青野委員：「まとめ」のところでコメントですけれど、1番目の空間放射線については過去の測定結果と同程度でした、それから3番目の環境試料中の核種濃度は過去の放射能レベル、日本国内の平均レベルと同程度でしたということで比較されているので良いのですが、2番目の全アルファ、全ベータ放射線濃度については相関関係が認められました、ということで最終結論である事業所由来の放射線物質による影響を確認できませんでした、ということに導かれる点が、一般の方に対して少し伝わりにくいのではないかなというふうに感じました。
相関関係の図を説明していただいた資料の14ページ、15ページ、16ページの上段に「全アルファ放射能濃度と全ベータ放射能濃度の相関関係が認められないことから人工の放射性物質の移流は認められない」という文言が記載されていますので、これをそのまま「まとめ」の方に追加すれば、理解しやすいのではないかと感じました。

○事務局：そのように修正させていただくことでよろしいでしょうか。

○村田委員長：相関関係にあるから他から移流がないことは自明のことではありますが、一般の方々からするとどうしてなのかと思うことはあると思いますので、追記修正をしていただけますでしょうか。

○事務局：分かりました。それでは、こちらの方は修正をさせていただきたいと思います。

○村田委員長：ちなみに、この資料1-1のスライドは公表されるのでしょうか。

○事務局：このままの形で評価会議資料として公表されます。

○村田委員長：この資料と令和7年度の年度報の両方ですか。

○事務局：本日の資料が全て公表の対象となっております。

○村田委員長：分かりました。それでは皆さんよろしいでしょうか。それではこれで令和7年度の年度報を公表させていただきたいと思います。

（2）令和7年度放射線管理等報告書について

○各事業所：令和7年度放射線管理等報告書について説明

○村田委員長：京都大学での排気口はスタックでしょうか。

○京都大学：そうですね。KURはスタックになります。排水口は、当研究所ですと、廃棄物処理場というところがありまして、そこに管理区域内の排水が全部集められますので、そこからの排水となります。

○村田委員長：分かりました。

○山本委員：資料2-1-1の2ページ目の表の注3のところにトリチウムの排水口の検出限界値が記載されていました。0.2ベクレル毎立法センチメートルで、リッター換算

するとおおむね 200 ベクレル毎リットルなんですね。最近の測定方法だともっと検出限界が低いと思うのですが、どのような測定方法とされているのか教えていただけますでしょうか。

○京都大学：トリチウムは液体シンチレーションカウンタで測っておりまして、こちらに示している検出限界値というのは、その下に記載していますが原子力安全委員会の指針に標準的な検出限界値というものが記載されているものを引用しています。つまり実際の測定における検出限界値ではありません、実績としてはもっと低い検出限界値です。

○山本委員：そういうことですか。わかりました。

（３）各原子力事業所における近況等について

○各事業所：原子力事業所における近況等について説明

○村田委員長：近畿大学での共同利用が 16 件、国際原子力人材育成イニシアチブ事業が 11 件で合わせて 27 件程度が外部利用ということだと思います。運転時間が 2025 年で 460 時間ありますが、だいたい割合として外部利用の割合がどれぐらいの時間になりそうでしょうか。

○近畿大学：すぐに数字が出てこないのが私のイメージですが、実際内部での利用としての学生実習は、前期の週 1 回という形になっております。その他、我々の研究所内での利用になりまして、イメージ的には外部の方の利用が多いということになります。特に夏場になっていきますと、その外部利用者の方々もやはり夏休み中の実習が多いですね。明日もあるのですが、この夏の期間はほとんど自分たちで利用していないというような実情でございます。

○村田委員長：低濃縮化を進められていると思うのですが、さきほど、申請を出しましたというお話をいただいたと思います。これはスケジュール的には順調なのでしょうか。

○近畿大学：こちらにつきましては、国の省庁連絡会というところと、原子力規制庁様にも、我々のスケジュールを示しておりまして、今現在ではそれを遂行しているということでございます。

○平尾委員：一応の確認なのですが、京都大学複合原子力科学研究所では、トラブル等はなかったということによろしいですか。その他の 2 つの事業所については、検査についても異常はなかったという記載があったので、一応確認と思ひまして。

○京都大学：はい、特に目立ったトラブルはありませんでした。

○村田委員長：では、これで終了ということで、事務局の方にお返ししたいと思います。

○事務局（司会）：本日の審議、こちらをもちまして終了させていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。